

[将来像] 7 人と自然が共生する地域を創る

自然環境の保全、再生、創造を進めつつ、自然と共生するライフスタイルが定着し、生物多様性が確保されている。

また、人の手が入ることで豊かな状態が保全される田畑、森林などからの安全でおいしい水・空気、食や木材など、自然から得られる恩恵や恵みを有効に活用できる持続可能な関係が構築されている。

キーワード

- ・ 上下流連携で森川里海の管理
- ・ 放棄林・遊休農地の利活用・最適管理
- ・ 多様な主体の自然環境保全への参画
- ・ 森林・農地の多面的機能の確保
- ・ 生物多様性の確保
- ・ 野生動物との共生
- ・ 自然からの恩恵(生態系サービス)の有効活用



企業の森づくり活動

夢提案

- ・ 30年後には人とコウノトリが互いに助け合い、共存している豊岡になってほしい。
(県立豊岡高校生)
- ・ 農地の有効活用を図り、食料自給率 100%を兵庫県から達成していく。
(みんなの夢会議参加者)



大空を舞うコウノトリ

将来像のあらまし

(1) 地域間の連携により、自然環境の保全・再生・創造が進んでいる

多自然地域での自然環境を管理するしくみが確立している
都市近郊での緑の創出や都市周辺山林の維持が都市環境を多様なものになっている
多様な主体による森林の保全・再生・創造活動が拡大している

(2) 森林・農地の持つ多面的機能が良好に保たれている

さまざまな担い手により森林や農地の適切な管理が行われている

(3) 生物多様性が保全・再生・創造され、野生動植物との共生が図られている

多様な生物と共生する自然が生かされ、生態系サービス(自然からの恩恵)を有効に活用している
野生動物の適切な保護管理が行われ、人と野生動物が共生している

(4) 自然の恵みを無駄にしない社会構造となっている

豊かな自然から得られる資源を地域で有効に活用するしくみが進んでいる

(1) 地域間の連携により、自然環境保全・再生・創造が進んでいる

多自然地域での自然環境を管理するしくみが確立している

- 流域単位での森林管理・活用の枠組みが整備され、民有林の共有化も進んでいる。
- 下流地域と上流地域との連携で適切な支え合いの関係ができています。
- 藻場再生、漁場かん養を目的とした森川里海のつながりが構築されている。

始まっている取組等

< 上下流連携による森林管理の必要性 >

- ・平成16年台風23号、平成21年台風9号等の災害を契機に、上流域の山林の荒廃が下流域の都市部に大きな災害をもたらす危険性があることへの認識が広がった。
- ・防災の観点に加え、漁業振興(豊かな海づくり)の観点からも、下流域の住民・事業者の間で豊かな森づくりへの関心が高まり、実践が広がりつつある。

台風通過後の奥赤集落(豊岡)



平成16年台風23号通過後の豊岡市但東町奥赤集落。土砂崩れで流れ出した何百本もの木が田畑を埋めた。

管理放棄された人工林(新温泉)

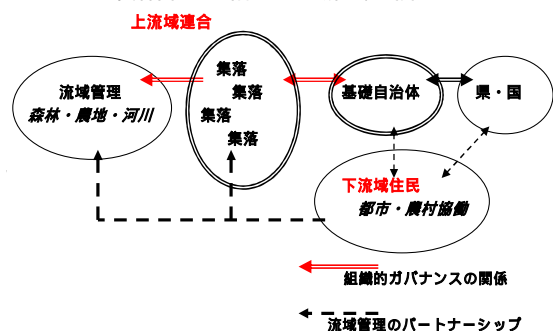


新温泉町檜尾集落。2世帯2人の集落だが広大な私有林を擁し、その過半が放置されてしまっている。

専門家の意見 - 『兵庫県の中山間地域の集落が消滅するときは、都会も消滅するとき』

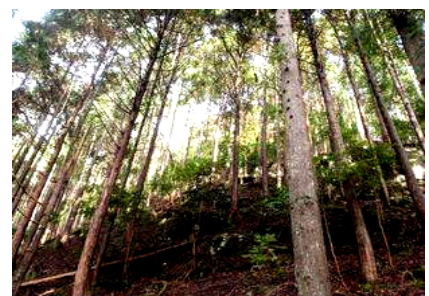
昔は集落が流域管理の中心的主体であり、集落と基礎自治体である市町村のパートナーシップで流域のガバナンス(管理・制御)が担われていた。現在は、その他に、国や県、森林組合といった多様な主体が流域に関与しているのに、それらを流域という単位で結びつけるシステムが存在しない。こういったシステムをどうつくるかを考えることが大切だ。(長期ビジョン推進委員会委員)

【集落再生を軸とした流域連携】



< 上下流連携による水源林のかん養 >

- ・水源の森を守るため、下流の自治体や企業が山林所有や寄付などによりサポート。上流の住民にも川を守る意識が芽生え、上下流連携による森づくりが浸透している。



丹波市内の森林

<地域の森林を支えるさまざまなしくみの広がり>

- ・木材の地産地消、森林管理の人材育成、森林カーボンオフセットのしくみなど、多様な主体により持続的な森づくりに取り組む動きが見られる。

= 森林の一括管理による大規模間伐の実施（丹波） =

上下小倉共有山管理組合では、地域住民の同意を取り付け、森林の一括管理のしくみづくりに成功。民有林、共有林合わせて330haに及ぶ森林の大規模な間伐を実現した。



管理の行き届いた森林（丹波）

<河川の上下流のつながりを通じた連携が盛んに>

= ため池の浚渫などに取り組んでいる漁業者（淡路） =

豊かな海を取り戻し、次代を担う若者たちに引き継ぐため、砂が締まって固くなった海の底を掘り返す、海底耕運に取り組んでいる。

また、栄養豊富なため池の水が海の魚介類を豊かにするとの考えから、ため池の泥さらいを農家と連携して行っている。



海を耕す道具

<海洋生物の棲み家、海の森（藻場）づくり>

= アマモ場造成に取り組むNPO =

NPO法人アマモ種子バンクは、アマモ場造成のための調査・研究、市民への普及啓発活動などを行っている。活動にあたっては、他団体との連携を重視し、「ブナを植える会」と協働した森の植樹活動にも取り組んでいる。

NPO法人海っ子倶楽部では、子どもから大人まで全ての人々に対して海洋環境保護及び海洋活動の安全性向上に関する事業を行い、美しい海を中心とした活力ある豊かな地域づくりを行っている。



アマモ場は海洋生物の生息環境

<地域や都市の住民が連携して清掃活動や希少な動植物を守る取組>

= 楽しみながら成ヶ島の環境を再生 =

国立公園成ヶ島を美しくする会では、絶滅危惧種のハマボウヤ、多くの貝類も生息する成ヶ島の清掃や自然環境保護に取り組んでいる。

この島の自然環境学習や清掃活動には、地域を超えた連携もみられ、地元活動団体と対岸の地元中学校の連携のほか、近畿府県からの環境観察イベント等により都市の住民も参加している。



ペットボトルや家電製品など、さまざまなごみが漂着する海岸（洲本）

取組の視点

森林の一括管理に向けての所有と利用の分離
下流等の都市住民の上流の森林管理への関与

- (1) 都市近郊での緑の創出や都市周辺山林の維持が都市環境を多様なものに行き届かしている
- 都市部の住民、NPO等が遊休農地を有効活用するなど、管理が行き届かない森林を維持している。
 - 空き空間が市民農園やガーデニングの場として活用され緑化が進んでいる。
 - 道路沿いや河川沿い、公園などの公共的な空間において、緑化活動グループなどによる緑化活動が展開されている。

始まっている取組等

<ニュータウン周辺の農地、山林の維持、利活用への参画>

- ・ニュータウン周辺の遊休農地や管理が行き届かない森林等の利活用、維持管理に住民が関わることによって、ニュータウンと周辺の一体的な環境改善に取り組んでいる。

= 都市近郊の遊休農地を市民農園として活用（川西） =

地域住民が主体となり、川西市の中心市街地にほど近い遊休農地を活用し、440区画の市民農園を開設。初回申し込みでは、希望者多数のため抽選となり、現在も入園待ちが絶えないほどの人気に。利用者の8割は川西市内の方。

付近のニュータウン住民の利用者も多いと考えられることから、ニュータウン住民が農に関わることで、周辺環境の維持の一助となっている。



遊休農地での市民農園(川西)

= 都市近郊の森林管理へのボランティア =

NPO法人ひょうご森の倶楽部は、安全で楽しい森林ボランティア活動をめざし、県下の森林整備や森林保全に関する教育、研修などを実施。活動地には、都市近郊の森林も含まれており、地元など多様な団体と連携し、森林ボランティアを行っている。



都市近郊の森林管理(川西)

<公共的な空間での緑化活動>

- ・道路沿線や河川沿い、公園など公共的な空間において、住民団体などが「県民まちなみ緑化事業」を活用し、さまざまな緑化活動を展開している。(P185 参照)

= 緑化活動グループ等による花緑いっぱい運動 =

兵庫県園芸・公園協会 花と緑のまちづくりセンターでは、公共的な空間での緑化活動に対し、花苗や肥料等の緑化資材提供の事業を実施するとともに、広く県民と協働できるよう、花緑いっぱい運動推進員を募集し、その推進員による「空間を活かした花壇づくり」などの緑化のワークショップを展開している。



住民による緑化活動(加古川)

= 企業活動による緑豊かな景観づくり =

尼崎21世紀の森づくり協議会では、尼崎臨海地域に立地する企業・工場とイメージを共有しながら、地域の活性化を図ると共に尼崎21世紀の森にふさわしいみどり豊かな景観を創出するため「尼崎21世紀の森型工場緑化」に取り組んでいる。



運河沿いの緑化(尼崎)

取組の視点

都市と多自然地域の一体的な環境改善

遊休農地や空き空間の有効活用

多様な主体による緑化活動への参画と緑化資材の提供などの活動支援

(1) 多様な主体による森林の保全・再生・創造活動が拡大している

- 都市部で開発を行う事業者が近隣や多自然地域での自然環境維持を支援している。
- 住民などによる買い上げや維持管理(ナショナルトラスト運動 など)によって森林、水源が保全されている。
- 森林カーボンオフセットの取組を通じて都市と多自然地域とが連携し、森林保全が進んでいる。

ナショナルトラスト運動：自然や景観を守るために買い上げなどにより住民がその所有者となり、開発から守る運動

始まっている取組等

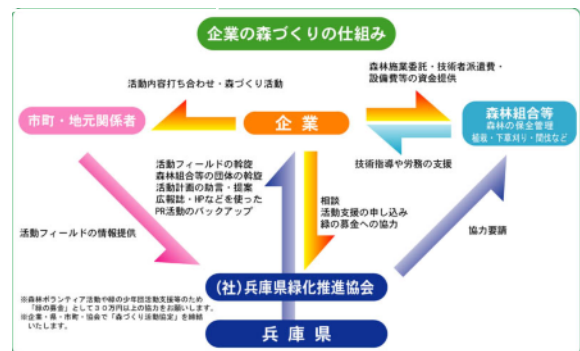
<地域の森林を支える取組の広がり>

- ・住民グループ、民間企業、NPOなど多様な主体による地域の森の保全活動が、森づくりに向けた制度の拡充とともに広がってきている。

= 企業のエコ活動をサポートする「企業の森づくり」制度 =

「企業の森づくり」制度は、環境保全等社会貢献に関心の高い企業や団体等が県内の豊かな自然環境を活用し、地域の方々にも森林保全に参画してもらう場を提供するもの。

地球温暖化防止や生物多様性の保全などの観点から、森林の役割に対する社会的な関心が一層高まる中で、「企業の社会的責任(CSR)」としての環境活動として、多くの企業が森づくりに関心を持ち、活動を始めている。



(社)兵庫県緑化推進協会の「企業の森づくり」制度

= 企業の森「油井鎮守の森づくり」(篠山) =

企業が社会貢献や地域との交流のため、地域の森林環境保全にマンパワー・資金を提供する「企業の森」の取組が、丹波地域でも広がっている。

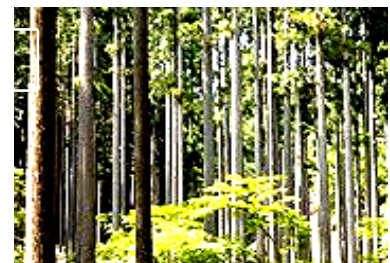
篠山市油井地区では、総合電機メーカー企業、油井生産森林組合、丹波県民局、篠山市で「油井鎮守の森を守る会」を発足させ、「子どもたちが楽しめる森づくり」をめざして、企業職員も参加しての間伐作業や遊歩道整備などが行われている。



油井鎮守の森づくり(篠山)

= 兵庫の森林を活用したカーボンオフセットの取組(宍粟) =

森林カーボンオフセットサービスを提供する企業では、県森林組合連合会と協力し、森林カーボンオフセットのしくみを構築しており、宍粟市内の森林で二酸化炭素の吸収量の測定を行うなどプロジェクトを開始している。森林管理コストの低減、森林組合の競争力向上が期待される。



宍粟市内の森林

取組の視点

- 広域での自然環境構築のしくみづくり
- 森林保全に関する基準、制度の拡充
- 企業のCSR活動と環境保全活動とのマッチング支援

(2) 森林・農地の持つ多面的機能が良好に保たれている

さまざまな担い手により森林や農地の適切な管理が行われている

- 針葉樹などの人工林が広葉樹との混交によって本来の森林の姿に戻り、森林がもつ多面的機能が十分に確保されている。
- 農林水産業に従事する若者が増加するとともに、高齢者、海外経験者も加わり、多様な担い手による農林水産業が展開されている。
- これまで農業と関わりのなかった業種からの新規参入が増加し、耕作放棄地などが減少している。

始まっている取組等

< 森林や農地の持つ多面的機能 >

・森林や農地などの自然は、豊かな恵みを私たちに提供してくれるだけでなく、自然災害を抑える防災・減災の効果や生物多様性を育むなど、多面的な機能を有している。

- ・洪水を防ぐ（洪水防止機能）
- ・土砂崩れを防ぐ（土砂崩壊防止機能）
- ・土の流出を防ぐ（土壌侵食防止機能）
- ・川の流れを安定させる（河川流況安定機能）
- ・地下に雨水をかん養する（地下水かん養機能）
- ・家畜排せつ物や生ゴミで作った堆肥などを分解する（有機性廃棄物分解機能）
- ・気温の上昇を和らげる（気候緩和機能）
- ・生物のすみかを提供する（生物生態系保全機能）
- ・心身をリフレッシュさせる（保健休養・やすらぎ機能）
- ・学習の場となる（農業体験・教育機能）

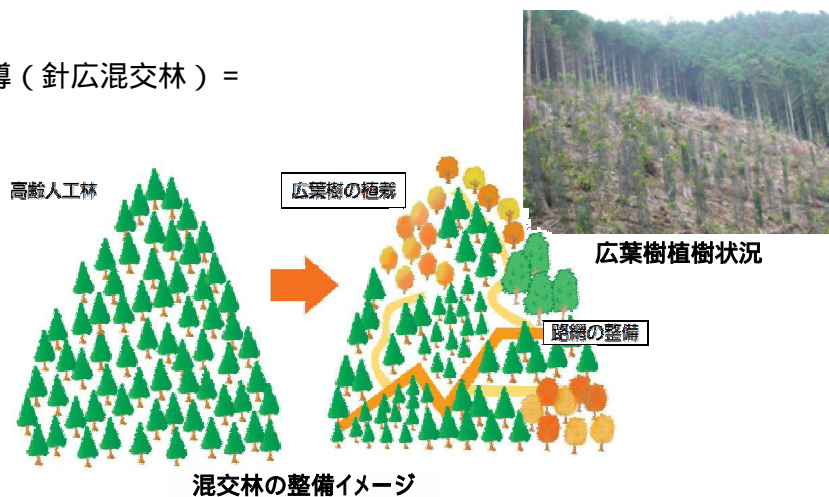
（出典：農林水産省資料）

< 針葉樹林と広葉樹林の混交林整備 >

- ・林業採算性の悪化により、伐採されずに放置される高齢人工林（46年以上）が急増する見込みであり、同じ流域に大きな面積で同林齢、同樹種の高齢人工林が増加すると、気象災害や病虫害により壊滅的な被害を受ける恐れがある。
- ・スギ・ヒノキ等の高齢人工林の部分伐採を促進し、広葉樹等を植栽することにより、樹種・林齢が異なり、水土保全能力が高く生物多様性を育む公益的機能を発揮する森林に復元する取組が始まっている。

= 天然林に近い森林への誘導（針広混交林） =

路網を整備して、高伐採されずに放置される高齢人工林の部分伐採をし、その跡地へのコナラ、ケヤキ、シバグリ等の広葉樹植栽を植栽。天然林に近い森林へと復元していく取組が進んでいる。将来的には森林整備も不要になるとともに、人にも動植物にも優しい自然となる。

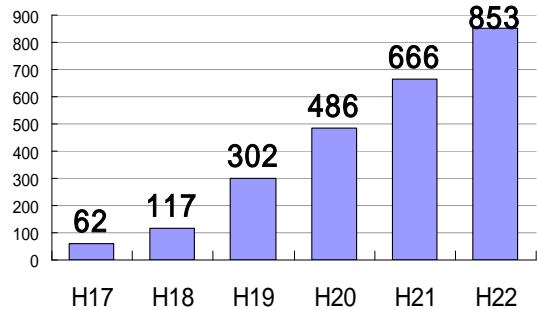


（出典：兵庫県豊かな森づくり課資料）

<新規就農者が増加し農地が有効に活用されている>

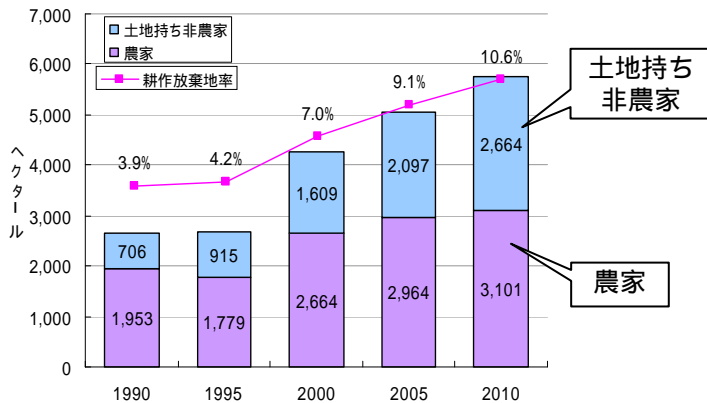
- ・若者をはじめU・J・Iターン就農者や定年退職者等の就農が拡大している。
- ・人口減少・高齢化により担い手が減少し、耕作放棄地の拡大が進んでいるが、新規就農の拡大の動きを受けて、耕作地として再び活用される可能性が広がっていくと考えられる。

(人) 【新規就農者数の推移(累計・兵庫県)】



(出典：兵庫県農業経営課資料)

【耕作放棄地面積の推移(兵庫県)】



(出典：農林業センサスを基に兵庫県ビジョン課作成)

耕作放棄地：「耕地のうち、過去1年以上作付けせず、しかもこの数年の間再び作付けする考えのない土地」



耕作放棄地(豊岡)

農業者の減少で拡大する耕作放棄地。長年放置すると再び耕作することは困難になる。

県民の意見

- 農地がたくさんありながら有効活用されていない。すばらしい農法、農地がたくさんあるので、有効活用できれば自給率100%は兵庫県からできるのではないか。(みんなの夢会議)

専門家の意見

- 農業を若い人にとって魅力ある働き場として再生させることが大切。都市とつながり、企業的な感覚で農業ができれば、地元にとどまる若者が増えるはず。(三木市企画政策課)

= 新しい農業ベンチャー支援制度(淡路) =

人材派遣会社が2008年(平成20年)に始めた農業ベンチャー支援制度。農業分野での独立を目指す人にチャレンジの場を提供。全国第一弾で淡路島に4haの農場を開設。参加者は3年間農業に従事する中で、栽培技術だけでなく農業経営や地域の活性化などを実践的に学ぶ。約12名(平成23年時点)が参加。

(出典：パソナチャレンジファーム)



パソナチャレンジファーム(淡路)

= 農業研修を行う農業生産法人(姫路) =

米、そば、大豆、野菜などを農薬・化学肥料に頼らずに育てる農業を実施。また、一般の人を対象とした農業体験や、子どもを対象とした食育を行うほか、将来の農業界を担う人材の育成に力を入れた農業研修を行っている。



新規就農者を育てる夢前夢工房(姫路)

< 農業のポテンシャルを引き出す新たな動き >

- ・ 就業者数、生産額ともに農林水産業の規模が縮小し、従事者の高齢化が進んでいるが、農業の今後の可能性に着目した企業などの農業参入も増えつつある。

【企業等の農業参入の状況】(特定法人貸付事業)

《累計》

区分	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
参入法人数	6法人	6法人	6法人	10法人	13法人	24法人
参入面積	4.4ha	6.2ha	6.2ha	12.5ha	19.9ha	41.0ha

(出典：兵庫県農政環境部資料)

特定法人貸付事業とは
 農業経営基盤強化促進法に基づき、市町等が特定法人(農業生産法人以外の企業等の法人)
 に対し農用地の貸付けを行う事業

県民の意見

- 人づてに田舎で百姓をしたいと言っている若者がいることを聞いて、何度か会って話すうちに、この地区に来ることになった。大学を中退し、姫路の夢前夢工房でしばらく修行してから、地区の古民家を借りて2人で住み着いている。(加西市の地域活動グループ)

専門家の意見

- 農業だけでは食えない。農業と何かを組み合わせることの意義は、集落営農でも変わらない。市場とのマッチングのためのコーディネーターが必要。(将来像研究会 地域空間再生検討チーム)

< 農のサポーターを育てる >

- ・ 農への関心や農のサポーターを育てることで、新規参入のすそ野が広がり、新たな担い手による農地の管理、耕作放棄地の解消につながる。

= 農業の担い手のすそ野を広げる取組 =

- ・ NPO法人原始人の会(加西)では、地元産の雑木を用いた木炭造り、貸し農園の運営、地元産米使用のどぶろくの製造など、多種多様な「農」にまつわるイベントを実施している。(写真1)



写真1

- ・ みぎた農園(たつの)では、全て無農薬、無化学肥料で野菜、果物を少量多品種で栽培。有機農業仲間のネットワーク組織を立ち上げ、イベントなどの機会も提供している。(写真2)



写真2

取組の視点

- 生物多様性保全機能や土砂災害防止機能などの公益的機能を高度にかつ安定的に発揮する森林や農地への誘導
- 新規就農にあたっての技術習得、資金・農地の確保
- 農・林の魅力向上、魅力発信
- 農のサポーターの育成(農業のすそ野を広げる農業体験、農村体験の取組拡大)

(3)生物多様性が保全・再生・創造され、野生動植物との共生が図られている

多様な生物と共生する自然が生かされ、生態系サービスを有効に活用している

- 行政、NPO、企業、個人などさまざまな主体が互いに連携した、生態系を守り育てる取組が広がっている。
- 都市や農村でそれぞれの地域特性に応じた生物多様性保全の取組が進んでいる。
- 生態系サービスの「見える化」により、人が生態系の一員であることを誰もがしっかり認識し、自然とのつながりを意識している。

始まっている取組等

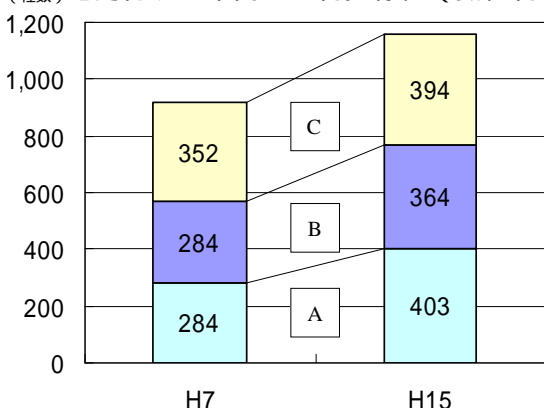
<生態系の公益的機能の再評価による生態系を守る取組の広がり>

- ・生態系がもつ機能のうち、水や食料、気候の安定など、人間が生きていくために必要で役立つ自然からの恩恵は「生態系サービス」と呼ばれている。
- ・開発や乱獲などの人間の活動、里地・里山の放置など自然に対する人間の働きかけの減少、外来種による影響などにより、貴重種の減少・絶滅や生態系の劣化・破壊などが進行しており、その影響はさまざまな分野に及んでいる。
- ・生態系サービスを楽しむためには、生物多様性を維持することが重要。
- ・人類も生態系の一員であることをしっかり認識し、資源を守り育てながら利用する視点が必要。
- ・「私」にとっての生物多様性を理解するには、「私」が生物資源からどのようなサービスを受け、「私」が生態系に与えている負荷を図化し、「見える化」してみることが有効。

〔生態系サービス〕(国連ミレニアム生態系評価による定義)

- 供給サービス：食料、燃料、木材、繊維、薬品、水など、人間の生活に重要な資源を供給するサービス
- 調整サービス：森林があることによって気候が緩和されたり、洪水が起こりにくくなったり、水が浄化されたりといった、環境を制御するサービス
- 文化サービス：精神的充足、美的な楽しみ、宗教・社会制度の基盤、レクリエーションの機会などを与えるサービス
- 基盤サービス：光合成による酸素の生成、土壌形成、栄養循環、水循環など、上記 ~ のサービス供給を支えるサービス

【劣化する県内の生物多様性（動植物）】

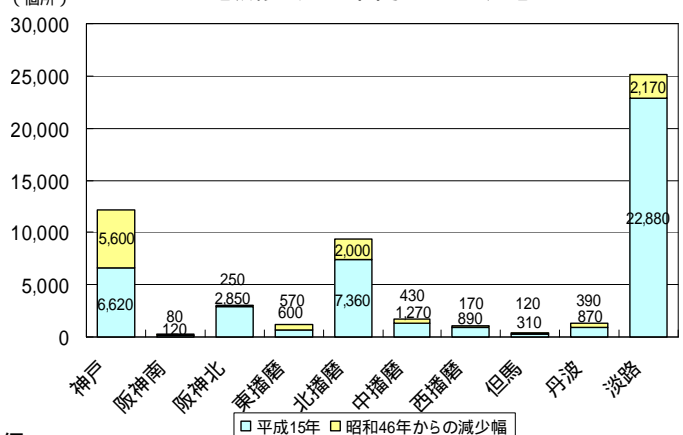


- A ランク：絶滅の危機に頻している種など、緊急の保全対策が必要な種
- B ランク：絶滅の危険度が増大している種など、極力生息環境、自生地などの保全が必要な種
- C ランク：存続基盤が脆弱な種

(出典：兵庫県版レッドデータブック)

人間活動や開発、里山や人工林の管理の粗放化、外来生物の持ち込みなどによって生物多様性が劣化している。

【減少する県内のため池】



(出典：兵庫県農林水産部資料(H15))

- ・ため池は農業用水の水源としての役割だけでなく、防災、レクリエーションの創出、生物多様性の確保等、様々なサービスをもたらしてきた。
- ・ため池が持つ多面的機能を今一度見直し、ため池管理者、地域住民等の参画と協働により、地域の財産として保全していく必要がある。

< N P Oなどによる生物多様性・保全活動 >

・生物多様性の保全と持続可能な利用を進めるうえで、行政はもとより県民、N P O等活動団体、事業者などさまざまな主体が連携し、それぞれの役割を担っていくことが重要であり、県内各地でN P Oなどによる生物多様性保全・再生活動が活発に行われている。

= 「生物多様性保全プロジェクト」 =

県内各地でN P O等による生物多様性保全・再生活動が活発に行われてきており、本県ではこれら活動への県民の参画を促進するため、活動モデルとなるプロジェクトを選定。

各団体の活動情報を広く発信し、企業などのプロジェクトへの参画も促している。

区 分	選定数	内 容
希少種の保全に関するもの	15	オオサンショウウオ生息地保護・保全対策の試み（社団法人兵庫県自然保護協会神戸支部）など
水辺環境の保全に関するもの（外来生物駆除を含む。）	10	東播磨地域における水辺環境の保全・再生（いなみ野ため池ミュージアム運営協議会）など
地域生態系の保全・再生に関するもの	9	六甲ブナの植樹、鉢伏高原におけるブナの植樹・育樹（ブナを植える会）など
生物生息・生育環境の創出に関するもの	2	尼崎中央緑地の生物多様な森づくり（アマフォレストの会）など

（出典：兵庫県自然環境課資料）
平成22年度「生物多様性プロジェクト」選定プロジェクト

< 都市や農村でその地域特性に応じた生物多様性保全 >

・生物多様性の保全は、単に多種多様な生物が生息できる自然環境を整備・保全するのではなく、子供たちが生物とふれあいながら、生物は人と共に歩んでいる多様な命たちであることを”遊びの場“の中で体験することで、生物多様性の大切さを次代に伝える取組であるともいえる。

= 都市での生物多様性を確保する取組（神戸） =

多自然地域だけでなく、都市でもその地域に応じた住民参加で生物多様性を確保する取組が必要である。神戸市では、市街化区域の緑被率が3割を越え、貴重な動植物の生息場所となるため池等も多数存在している。

このような自然環境に親しみ、適切な管理の普及により、生物多様性を確保するため、学校ビオトープ（100校の小学校、11校の中学校）や、公園や下水処理場でのビオトープ、また企業の敷地を活用したビオトープづくりが進んでいる。



神戸市立神出自然教育園ビオトープ

県民の意見

➤ 都市部での生物多様性や生態系の保全をどのようにしていくのか。公園・街路樹・学校の自然もそれらの観点で考えていく必要がある。子供にとっては「遊び場」になり、大人にとっては「憩いの場」になる。（長期ビジョン推進委員会委員）

= うるおいのある水辺空間の創出（豊岡） =

円山川水系に残されている特徴的な環境を保全するとともに、かつてみられた湿地環境や河川と水路、水田の連続した流れなどを再生・創造することにより、多様な自然環境の保全・再生に地域が連携して取り組んでいる。

（円山川水系自然再生計画）



地域で連携したモニタリングの実施(メダカの調査)

取組の視点

生態系サービスからの恩恵や、生態系に与える負荷の「見える化」
都市や農村等それぞれの地域特性に応じた方法での生物多様性の確保

- (3) 野生動物の適切な保護管理が行われ、人と野生動物とが共生している
- 人と野生動物の棲み分け緩衝地帯（バッファゾーン）が整備されるなど、奥山と里地との共生が進んでいる。
 - 狭域だけでなく、県境を越えた広域的な地域連携によって野生動物の適切な個体数管理や被害低減、外来種の適切な管理・抑制ができています。
 - 野生動物保護管理の担い手づくり（獣害対策の専門家や狩猟者の育成等）が進んでいる。

始まっている取組等

<野生動物の保護管理>

- ・野生動物による農作物被害が甚大な地域では、山裾に人との棲み分けを図る緩衝帯（バッファゾーン）を設置し、奥地に実のなる広葉樹林を育成する取組がすでに始まっている。また、そうした取組には集落だけでなく、都市の人たちも参画している。
- ・野生動物の移動・生息域は県境を越えている場合も多く、個体数管理や被害管理などについても県境を越えた広域的な連携が必要となる。

= コウノトリと共生する地域づくり =

但馬地域では、コウノトリの野生復帰の取組が着実に進められている。地域では農薬や化学肥料に頼らない環境創造型農業が拡大。

餌場となる湿地再生の取組が展開されるなど、コウノトリと共生する地域づくりの輪が広がっている。



田んぼで餌を探すコウノトリ



コウノトリ育むお米

= 獣害レンジャーへの学生などの参画 =

シカ・イノシシなどの野生動物による農林業への被害が深刻化し、過疎化・高齢化による人手不足のため対策を実施することができない小規模集落で、野生動物被害防止に向けたボランティア活動を行う「獣害レンジャー」に都市部の学生などが参加している。



集落に関わる学生たち(豊岡)

取組の視点

自然と共生する地域づくり、獣害に強い集落づくり
 県境を越えた広域的な地域連携による野生動物の適切な個体数管理や被害管理
 野生動物保護管理の担い手づくり

(4)自然の恵みを無駄にしない社会構造となっている

豊かな自然から得られる資源を地域で有効に活用するしくみが進んでいる

- 農林水産物の地域内や県内での地産地消が進んでいる。
- 森林育成から伐木・建築までトータルでのコーディネート（木材の地産地消）が確立している。
- 狩猟・捕獲後の野生動物が地域資源として有効活用されている。

始まっている取組等

<自然の恵みを無駄にしない地産地消に向けて>

- ・自然を守り育み得られた生産物や資源をその地域や県内で消費する構造へと移行していくことは、人が自然との共生を図る手段の一つといえる。
- ・さらに、地産地消を徐々に拡大していくことで、県産、国産の農林水産物の品質や安全性が見直されるなど、地域内への再投資につながる。

= 農林水産物の地産地消への取組 =

県産食品の安全性や特長等を確認・認証する「ひょうご食品認証制度」に基づく認証食品の認証数が着実に増加しており、加工食品についても地産地消が進んでいる。

食品産業と農林水産業の連携による県産物にこだわった新たな加工食品の開発の取組が始まっている。



兵庫県認証食品ロゴマーク
(愛称:ほっとちゃん)

= 「木材コーディネーター」の養成（丹波） =

NPO法人サウンドウッズは、育林から伐採・製材、建築までを一貫して差配する「木材コーディネーター」の育成を実施。人材の育成にあたっては、山の立木から木材生産、加工におけるすべてのプロセスに関わり経験を積むとともに、各地域の生産体制とも連携をとり、俯瞰的な視点で地域の木材の状態を細かく把握し、木を有効に活用することができるような人材を地域で育成することをめざしている。これらは地元産材利用促進の画期的な取組として注目されている。



森林での実習

= 駆除したシカを有効活用（佐用） =

佐用町商工会青年部では、シカによる被害の削減を考えるとともに、捕獲後に棄てられることの多かったシカ肉を佐用の自然が育てた恵みと考え、「佐用しか商品化プロジェクト」を展開。「しかコロッケ」「しかステラ」「しかカレー」「しかメンチカツ」「佐用バーガー」などを商品化・ブランド化し、地域の活性化へつなげている。



佐用バーガー

しかコロッケ

県民の意見

- コウノトリ育むお米が今日本全国で飛び交っている。消費者の方に但馬のお米はおいしいと言いつけてもらい、どんどん農業者の方を元気にしてもらいたい。（みんなの夢会議）

取組の視点

農林水産資源を生かすコーディネーター、人材育成
地域内再投資による農林水産品のブランド化と地産地消の拡充